

『今月の天候と農作業』

通巻第5660号
2月号
令和4年2月3日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

期間のはじめを中心に寒気の影響を受けやすい時期があるため、向こう1か月の気温は平年並か低いでしょう。
期間の前半を中心に湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1か月の日照時間は平年並か少ないでしょう。

【 確 率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	40	40	20
降水量	九州南部	30	30	40
日照時間	九州南部	40	40	20

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 2月5日(土)～ 2月11日(金)

冬型の気圧配置で晴れる所もありますが、気圧の谷や寒気の影響で雲が広がりやすく、雪や雨の降る日があるでしょう。

<2 週目の予報> 2月12日(土)～ 2月18日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 2月19日(土)～ 3月4日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆早期水稲

1 スクミリンゴガイ対策

スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）対策は、厳寒期の耕うんが効果的です。発生ほ場では、トラクターの走行速度を遅くし、ロータリーの回転数を早くすると、殺菌効果が高まります。

2 播種と出芽

浸種は発芽揃いを良くするために水温が10℃の場合は10日間、15℃の場合は7日間程度を目安に行います。10℃以下の低温を避け、夜間の冷え込みにも注意します。浸種後、催芽を30℃～32℃で24時間行います。

播種量の目安は、稚苗では1箱当たり催芽粃180g程度です。苗立枯病等の防除を兼ねて播種後にかん水し、覆土は粃が隠れる程度とします。

3 緑化と硬化

出芽後は、寒冷紗等で本葉1葉目が展開し、2葉目が抽出するころまで遮光します。温度は昼間が25℃以下、夜間は15℃以上で管理しましょう。

硬化では、前半は温度が昼間は20℃以下、夜間は10℃以上で管理し、後半は外気にならします。かん水は床土温度を下げないように午前中に行いましょう。

中苗や成苗では、播種後20日目と30日目頃に液肥を散布し、散布後は軽やかにかん水して葉焼けを防ぎます。

◆ムギ類

1 穂肥

平年は早いところで、月末には幼穂形成期を迎えます。小麦では2月中旬に10a当たり窒素成分で2・5kg、加里で2kg程度を施肥します。

2 土入れと排水対策

土入れは肥料の流亡防止、雑草抑制や防寒効果があるため、節間伸長期前までに行います。排水対策として、ほ場の周囲や条間を作溝します。

（福川 泰陽）

施設野菜

◆共通事項

日中の温度確保や、内幌カーテンの開閉による光線確保により光合成を促進します。また、午前中の内幌カーテンの開閉は、ハウス上部の空気が十分に暖まってから数回に分けて行います。同時に、植物の結露が多い場合は、早朝加温や谷換気などの設定条件を見直します。

◆きゅうり

促成のつる下ろし栽培では、「芯止まり」になりやすいので、開花節位は生長点から3～4節目を目標とし、開花節位が上がった場合には強めの摘果を行うとともに夜間の設定温度を上げて、草勢維持

に努めます。

◆ピーマン

受光態勢をよくするため、下位節の徒長枝を摘除するとともに、中位節以降の側枝も伸びたものは2～3節で摘心し、下位節まで光が当たるようにします。開花節位が上がった場合は、こまめな収穫を行うことで着果負担を抑えます。

◆トマト

果実肥大と着色促進及び食味向上のために、日射量の確保と葉数確保が必要となります。葉数は1果当たり15～18枚程度を確保し、早朝の結露で裂果が発生しないように、早朝加温や換気による除湿を行います。

◆いちご

曇天が続く場合は、成熟に要する温度が確保できず、成熟期間が長くなりますので、裂果等の品質低下の防止と、着色促進のため夜温をやや高めに管理します。また、大玉果や食味向上のため裾玉を摘果します。今後、ハダニが増加しやすい時期になりますので、古葉や収穫の終わった果梗の除去をこまめに行い、定期的な薬剤散布を行います。

(吉山 健二)

葉茎根菜類・いも類

◆共通事項

これから播種や植付けを行う品目では、発芽や活着を促すために、地温と土壤水分の確保が重要です。土壤を片手で握り、団子状態になる程度の土壤水分を目安にマルチングをします。また、この適度な土壤水分は、土壤消毒剤（くん蒸剤や粒剤）や除草剤の効果が最も高くなる状態です。

◆食用かんしょ

来月にかけて、トンネル栽培の挿苗時期となります。採苗10日前頃から育苗ハウス内の苗は外気温に慣らしながら管理し、徒長を防ぎ、充実した苗に仕上げます。近年、地際部の茎が黒変したり芋が腐敗したりするサツマイモ基腐病が発生しています。発病苗をほ場に植え付けると病害の発生を広げてしまう恐れがあるため、育苗床での発病株の早期抜根及び持ち出しを徹底して行い、苗床に入る際は靴底の土汚れを落とすようにします。苗を切り取る高さは地際から5cm以上離し、切り取った苗は病害防止のため薬剤処理をします。調整後の薬剤は日光や汚れなどで分解しやすいので、使用期間は1日とします。苗は適湿・適温を保ちながら数日間取り置きすると挿苗後の活着が良くなります。定植予定のほ場は、十分な地温確保のため前日からトンネルを密閉して地温確保（18℃以上）に努めます。

◆さといも

早生品種の植付け時期です。連作障害が出やすいため最低4年はさといもを栽培していないほ場を選び、センチュウ対策として土壤消毒を行います。種いもは病虫害や芽つぶれ等のない健全なものを選び、大きき順（30～50g程度）に揃え、種いもの表面に付着している土を洗浄し、水に浮く種いもは廃棄した上で、センチュウや乾腐病予防の薬剤消毒を行って植付けます。

(川崎 佳栄)

果樹

1 常緑果樹

◆完熟きんかん

完熟きんかんの出荷が最盛期を迎えます。

これから暖かくなり、過熟やうるみ果の発生が懸念されますので、ハウス内の温度管理に気を付けます。昼間は10～15℃を保ち、夜間は凍害に遭わないように注意します。完熟果実は、打ち身や圧迫による傷害を受けやすいので、過度の積み重ねを避けるなど、丁寧に扱います。

◆マンゴー

早期出荷作型では、果実が5 cm 以上になったら、結果枝2～3本に対して結果数を1果に調整します。また、厳寒期を過ぎると、夜間の外気温が徐々に高くなってきますので、あざ果の発生に注意が必要です。早朝や日の出後に果実結露が生じないように、ヒートポンプの除湿設定やこまめな早朝換気により湿度を低く保ちましょう。

後期出荷作型はこれから開花期を迎えますので、夜間の十分な加温や早朝換気を行うことで湿度を低く保ち、花の時期から軸腐病などの発生をしっかりと抑えます。花穂をひもでつり上げ、風通しを良くすることも重要なポイントです。灰色かび病に対する微生物殺菌剤の活用も有効です。

2 果樹全般

◆有機質の投入と土壌改良

果樹栽培において高品質・高収量を得るためには、土壌の通気性の確保が重要です。完熟たい肥や稲ワラなどの有機物を施用し、土壌の通気性の改善を行います。

土壌の酸性化は肥料の吸収や根の生育を阻害して、樹勢低下を招きます。土壌分析を行い、必要に応じて石灰質資材で調整します。

(鈴木 美里)

花 き

◆電照ギク

2～3月出荷作型は最も暖房コストがかかります。それぞれの品種・系統に適した変夜温管理を行い、コスト削減に努めましょう。

また、ハウス内の湿度が高まると白さび病が発生しやすくなりますので、換気除湿や循環扇の活用、定期的な農薬の予防的散布などの対策を行いましょう。

◆スイートピー

日長時間が長くなると、蒸散量や養分要求量が増加しますので、かん水及び施肥を遅滞なく行い、草勢低下を防ぎましょう。

また、花シミの発生が増加する時期となります。花シミの発生要因は大半が水滴の付着であるため、循環扇の活用や換気除湿等により結露防止に努めましょう。

◆ホオズキ

地下茎の植え付けが本格的に始まる時期となります。

病害虫をほ場に持ち込まないためには、地下茎の選別・調整をしっかりと行うことが重要です。また、必要に応じて植え付け前に地下茎の消毒を行いましょう。

◆トルコギキョウ

天候不順時には、ブラスチングやチップバーンが発生しやすくなります。

生育後半の過剰施肥を控えるとともに、不要な枝や蕾の摘除、カルシウム剤の葉面散布等により発生軽減を図りましょう。

◆ラナンキュラス

収穫量が徐々に増加してきますので、草勢低下防止のために液肥を定期的に施用しましょう。

また、ハウス内温度が低すぎると、光合成量の減少により収量に影響しますので、日中の温度管理は15℃程度を目安にしましょう。

(藤原 明紀)

畜産

◆家畜防疫対策

令和4年1月19日現在、全国9県において14例の鳥インフルエンザが発生しています。国内の野鳥からもウイルスが確認されており、野鳥が営巣地に帰る4月までは、農場への侵入リスクが高い状況が続きますので、防鳥ネットに破れ等がないか点検し、破れがあれば補修をしてください。

その他の家畜伝染病についても、ウイルスが伝染しやすい気象条件にあるため、農場にウイルスを侵入させないように、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物等の侵入防止対策等の飼養衛生管理基準を遵守しましょう。

◆家畜

先月同様、寒さが厳しく、乾燥する時期になります。

特に、幼畜は、寒さや温度変化に弱いので、適切な温度管理と換気を行いましょう。

乾燥により埃や塵が多くなるため、呼吸器病対策のために、細霧器等を使用して湿度を適度に保ち、畜舎内が乾燥しすぎないように留意します。また、畜舎内の温度維持のためカーテン等で舎内を閉め切ることが多くなり、アンモニアガス等が溜まると呼吸器病等の蔓延につながりますので、換気扇等によるこまめな換気を行います。

幼畜の寝床は常に清潔な状態に保ち、風が体に直接当たらないようコンパネ等で風を防止するとともに、コルツヒーター等の保温器具を活用し、防寒対策を実施します。

◆飼料作物

イタリアンライグラスやエンバクの生育期になります。翌月から収穫作業等が始まりますので、飼養管理に影響がでないよう計画的な作業に向けて収穫機械等の点検を行います。

(藤井 真理)

特用作物

◆茶

1 春肥の施用

春肥は、一番茶を始め二・三番茶の収量品質向上に重要な肥料です。2月上旬頃から、2～3回に分けて施用するとより効果的です。肥料の種類や散布量は地区の基準に準じ、畦間全面に幅広く散布しましょう。施肥後は根を傷めない程度に軽く混和しましょう。樹勢の低下が見られるほ場では、春整枝後に液肥を3回程度散布すると樹勢回復に効果的です。

2 春整枝の実施

春整枝の時期は平均気温10℃が目安です。平坦地では2月中旬から、山間地では3月上～中旬頃に実施しますが、一番茶摘採期の集中を避けるため、品種の早晚生や地域の微気象等を考慮し整枝時期を調整しましょう。その際は、整枝直後に急激な低温に当てないように天気予報に注意してください。

整枝の高さは、葉層を8センチ以上確保した上で、最終摘採位置から3～5センチ高い位置が目安ですが、秋整枝を実施した茶園では、一番茶となる芽にかからない高さで丁寧に整枝しましょう。

また、萌芽15日前からは防霜対策が必要となります。計画的に防霜ファンやスプリンクラーの点検・整備を行うなど、対策に万全を期してください。

3 カンザワハダニの防除

カンザワハダニの防除適期は、産卵を開始する気温10℃となる二月下旬～三月 月上旬頃です。

地区の暦に準じ、裾部や葉裏へ薬液が十分にかかるよう散布してください。散布前までに、春整枝と裾刈りを済ませておくことより防除効果が高まります。

(松尾 啓史)

◆しいたけ

1 植菌と仮伏せ

植菌は、暖かくなると害菌の繁殖も強力となるため、遅くとも3月中旬までには終わらせます。

仮伏せは植菌した種駒の乾燥を防ぎ、初期活着を促進する作業です。菌糸の活着・伸長に必要な温度と湿度を保つ必要があり、本県では、地際から50～60センチ以下の高さに横積みする方法が多く使われています。ほだ木の周囲を笠木や遮光ネット等で直射日光や風が当たらないように被覆し、上面は雨が良く通り、かつ日陰が出来るようにして保温・保湿を図ります。

2 寒子づくり

袋掛けやビニール被覆を行い、良質なしいたけの生産に努めます。

3 採取

発生したしいたけは、目標の品柄に応じて若干早めに採取するなど、品質の向上に努めます。特にほだ木の表面を傷めないように、かつヒダに触れないよう丁寧に採取します。

採取後は速やかに乾燥し、湿気が入らないようにポリ袋などで密封し、箱に入れて冷暗所で貯蔵します。

(堀川 和也)

◆たばこ

今月は、子床管理と施肥畦立が主な作業となります。苗の良否が本畑植付以降の生育に大きく影響しますので、健苗育成に努めましょう。

- 一 苗床肥土は排水・通気性・水もちが良く、病害虫が発生しない、良質な肥土を使用しましょう。仮植は、葉数五枚苗（米粒大までの葉数）で、根張りの良い苗を植えましょう。かん水のポイントは、活着までは床面が乾かない程度にかん水を行い、活着後は夕方床面が少し乾く程度にかん水をやや控えめにして、病害発生や根腐れ防止をはかりましょう。また、苗床が高温多湿にならないよう温湿度調整（管理温度は二〇～二五度）を行いましょ。本畑植付十日前ぐらいからは、苗の根張りを促進するために、換気とかん水制限をして順化処理を行いましょ。
- 二 畦立は、ねり畦防止のため、土壌水分に注意して行ないましょ。また、根張り促進のための地積確保と、排水対策も含めて三〇cm以上の高畦にしましょ。被覆は早作早進のため透明マルチを原則とし、黄斑えそ病対策等必要に応じてシルバーマルチを活用しましょ。
- 三 春消毒や苗床での農薬使用は、使用基準に則って最善の注意をはらいながら行いましょ。
(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

2月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。
(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	病害虫全般	—	<p>いずれの病害虫も、多発してからでは防除効果が劣るので、発生初期の防除を徹底します。また、薬剤抵抗性害虫および耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤の連用は避けます（ローテーション散布の徹底）。</p> <p>多重・多層被覆にしているところでは、換気が悪く病害の発生が助長される傾向があるので注意が必要です。各種病害の罹病葉等は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。</p>
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 灰色かび病 褐斑病	やや多 やや多 並 やや少	うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病気は多湿条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。
	黄化えそ病 (MYSV) ミナミキイロアザミウマ	並 やや少	<p>黄化えそ病の感染株は、速やかに根ごと株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し完全に枯れるまで密封処理します。</p> <p>また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、最低でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。</p>
	病害虫全般 (改植時の留意点)	—	<p>ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は20日間以上蒸し込みます。</p> <p>また、改植時には粒剤や灌注剤等による防除を行います。</p>
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病	並 やや多	斑点病は多湿条件、うどんこ病は乾燥条件で発生しやすいので、ハウス内の適正な温湿度管理、排水対策等を徹底します。
	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ ハコナジラミ	やや少 多 多	<p>ヒラズハナアザミウマの発生が多くみられます。主に花の中に生息していますので、薬剤防除は、薬液が花の中にしっかり付着するように行います。多発時は複数回の連続防除が必要です。</p> <p>タバココナジラミは、今後、気温の上昇とともに活動が活発になるため、低密度のうちに防除を徹底します。</p>
冬春トマト	葉かび病 すすかび病 灰色かび病 疫病	並 やや多 並 並	いずれの病害も多湿条件で発生しやすいので、施設内が多湿にならないようハウスの換気に努め、曇雨天が続く時は日中でも暖房機の送風機を稼働させるなど除湿に努めます。
	ハコナジラミ トマト黄化葉巻 病 (TYLCV)	やや多 並	TYLCVを媒介するタバココナジラミは、今後、気温の上昇とともに活動が活発になるため、低密度のうちに防除を徹底します。また、発病株は伝染源になるため、根ごと抜き取り、適切に処理します。
冬春いちご	うどんこ病	並	うどんこ病は、多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発生初期の防除を徹底します。
	ハダニ類	やや少	ハダニ類は、寄生数が増加してからの防除は難しくなるので、低密度時に防除を徹底します。また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、天敵や物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。
	オンシツコナジラミ ヒラズハナアザミウマ	やや多 やや少	<p>オンシツコナジラミは、今後、気温の上昇とともに活動が活発になるため、低密度のうちに防除を徹底します。</p> <p>ヒラズハナアザミウマの果実への加害は、例年3～4月以降に顕著に認められますが、低密度時から青色粘着板による誘殺などの防除対策を講じましょう。</p>

- 1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。
- 2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。

